



秋の野に想いをめぐらしながら

新型コロナウイルス感染症が差別を生んでいます。

県外ナンバーの車を傷ついたり差別的な張り紙をしたりする様子が、ニュースで流れています。

「感染者狩り」横行。実名特定罵倒の電話。

ある新聞の見出しです。コロナ禍で社会の分断が加速化し、排他志向が高まり、新型コロナウイルスより人様が怖い社会になっています。

インターネット上では、感染者やその家族を特定し、中傷や差別的な内容の書き込みが繰り返され、投稿の内容は敵意をむき出しにしたものへと広がっています。

相手の立場に立って考えることが難しく悲しい現実があります。新型コロナウイルス感染症がもたらす、差別の問題にあらがうにはどうしたらよいのでしょうか。

道徳的な説得をしても、おそらく効果はあまり期待できないようです。

さて、季節は秋。

厳しい残暑の続く中、各地からハギやススキ、オミナエシなどの便りが届き、秋の七草が晩夏から秋への移ろいを刻々と映し出しています。その七草を詠んだ「万葉集」の山上憶良の歌をご存じの方は多いのではないのでしょうか。

「秋の野に 咲きたる花を指折り かき数ふれば 七種の花」萩の花 尾花葛花 など
この花をみなへし また藤袴 朝貌の花」

秋の花はどこかに陰を宿しています。吾亦紅の暗赤色はもとより、桔梗の青、女郎花の黄、彼岸花の真紅でさえ、涼しくひそやかに遠慮がちに花を咲かせています。

先人が積み上げてきた秋の季節感、驚くほど繊細で寂しさが漂います。

「秋の野に 乱れて咲ける花の色の 千草にものを思うころかな」(古今和歌集・紀貫之)

人の幸福は、周囲に伝染し

て他の人を幸福にする力を持っている。

人間関係のトラブルは、他者の心に土足で踏み込むことから現れます。

世の中にはいろいろな人がいます。ものの見方や感じ方は人それぞれです。

「世の中には自分の感じ方や価値観と違う人がいる」という前提で他者と向き合うことは、多様性を認めるという意味で心の寛大さにつながります。

自分ファーストの考えが広まっています。声高に叫ばれる安易な主義主張やフェイクニュースをうのみにして、排他的な態度をとるのは終わりにしたいものです。

自らの心のありようを見つめながら、秋の七草を探している人がいます。



指宿市長
豊留悦男